

学校でのいじめにおける 傍観者の分類とその傾向 ～傍観者によるいじめの抑制に向けて～ T.R<社②ゼミ>

1. はじめに

近年、学校内でのいじめが増加していると言われている。いじめは大まかに物理的な攻撃によるいじめ、精神的な攻撃によるいじめの2つに分けられ、SNSの普及によりネット上でのいじめも急増している。文部科学省(2022)によるといじめは特に小学校で著しく増加しており、中学・高校でも増加傾向にある。今回はクラス内で起こるいじめに的を絞り、直接的ないじめの現場でのいじめの抑制について考えた。

武田(2022)によると、いじめには四層構造というものが存在し、いじめを行う加害者、いじめを受けている被害者、周りで見て見ぬふりをする傍観者、周りで囃し立てていじめに間接的に加担する観衆の4つの役割があると言われている。また、いじめにおいては大多数の人間が傍観者として関わっており、傍観者の立ち居振る舞いがいじめに良い影響も悪い影響も与える。そこで、もし傍観者を仲裁者に変えることができればいじめの抑制につながるのではないかと考えた。

また、藤村(2018)によると、傍観者は他の傍観者と同調することで自分自身の責任や避難が分散されると思い、「いじめには一切関わらないのが一番だ」と考えている無関心型傍観者、周囲の者が積極的にいじめを止める行動を起こさないことで事態は緊急性がないと思い、「いじめられる子にもいじめられる要素がある」と考えている関係拒否型傍観者、被害者を助ける行動を起こせばそのことで加害者から攻撃を受けると思い、「自分がいじめの標的になって攻撃されたら怖い」と考えている自己防衛型傍観者に分けられると分かっている。

さらに、佐久間・朝倉(2018)によると、「自分はいじめを止める事ができる」という自己効力感や正義感が強い人が仲裁者的な行動を取る傾向にあることが示唆されている。

今回使った援助規範に関する尺度(箱井・高木, 1987)によると、援助規範は自分のことは後回しにし、自己を犠牲にしてでも他者を援助しようという意識である「自己犠牲規範」、援助に見返りを期待し、

援助を物と同じように交換可能な対象とする意識である「交換規範」、何ら報酬を期待することなく他人に恩恵を与えたり、返済的な行為としての行動とに関する意識である「返済規範」、自分よりも弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人々に対する救済、分与に関する意識である「弱者救済規範」の4つに分けられる。今回はこの4つの規範の中で「自己犠牲規範」が仲裁者に最も必要な要素に近いと考え、渡部(2000)による傍観者意識尺度の質問紙とともに調査をおこなった。

2. 仮説と調査方法

2.1 仮説

①被害者を助けたい気持ちはあるが加害者が怖くて行動できないだけの自己防衛型傍観者は弱者救済規範が1番強い

②いじめに気付いてはいるが助けようという気持ちが薄い無関心型傍観者は弱者救済規範が1番弱い

つまり自己防衛型傍観者が最も仲裁者に変わりやすい、というものだ。

2.2 調査方法

竹園高校の1・2年生を対象にグーグルフォームで傍観者分類・援助規範尺度に関する質問にそれぞれリッカート尺度で回答を求めた。内訳は1年26人2年24人、うち女子33人男子16人不明1人であった。

表1 傍観者意識尺度についての項目

1. いじめられている子を助けて、仕返しされるのがこわい
自 2. 黙っていれば、自分がいじめられることはない
己 3. まじめぶって、止めに入っていると思われたくない
防 4. いじめつ子に逆らわないほうが安全だ
衛 5. 止めに入るのが恥ずかしい
6. 止めに入って自分もいじめられるといやだ
7. いじめられている子を助けて仲間だと思われたといやだ
8. いじめられている子にも悪いところがある
関 9. いじめたくなる気持ちも少しはわかる
係 10. 理由によってはいじめも悪いとは言えない
拒 11. 人をむかつかせる子はいじめられてもしかたない
否 12. 自分も一緒にいじめたくなる時がある
13. 止めに入るのが正しいかどうかわからない
無 14. 煩わしいことには関わりたくない
関 15. いじめは自分にはあまり関係ないことだ
心 16. 自分のことで精一杯で、人のことまで考えられない
17. 見ているだけだから自分は悪くない

表2 援助規範尺度についての項目

1. 自分に好意を示してくれたからといって、自分好意をしてお返しをする必要はない。
2. 人から何かを贈られたら、同じだけお返しをすべきである。
3. 過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の念を持ち続けるべきである。
返 4. 恩人が困っている時には、自分に何があるかと助けるべきである。
済 5. 人にかけた迷惑は、いかなる犠牲を払っても償うべきである。
6. 以前私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである。
7. 受けた恩は必ずしも返さなくてもよい。
8. 人は自分を助けてくれた人を傷つけるべきではない。
9. 相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをする必要はない。
10. 救う能力が自分に備わっていない時には、救う努力をしても無駄である。
11. 人が困っている時には、自分がどんな状況になろうとも、助けるべきである。
自 12. 自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けすべきである。
己 13. 自己を犠牲にしても、人を助ける必要はない。
犠 14. 将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない。
性 15. 自分が不利になるのなら、困っている人を助けないこともよい。
16. 大勢の人が同じ状況で困っている時、まず以前私を助けてくれたことのある人を一番最初に助けるべきである。
17. 社会の利益よりも、自分の利益を第一に考えるべきである。
18. 人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい。
交 19. 人の好意には甘えてもよい。
換 20. どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない。
21. 見返りを期待した援助など、全く価値がない。
弱 22. 私を頼りにしている人には、親切であるべきだ。
者 23. しいたげられている人を、まず救うべきだ。
救 24. 自分より悪い境遇の人に何かを与えるのは当然のことである。
済 25. 困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然のことである。
26. 社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである。

3. 実験結果

3.1 傍観者分類について

傍観者分類に関しては、無関心型傍観者11人、関係拒否型傍観者24人、自己防衛型傍観者15人であった。

3.2 救済規範について

傍観者分類別の援助規範について因子分析を行い、最も高い因子得点別に回答者を因子ごとに分けてグラフにまとめた。(図1)

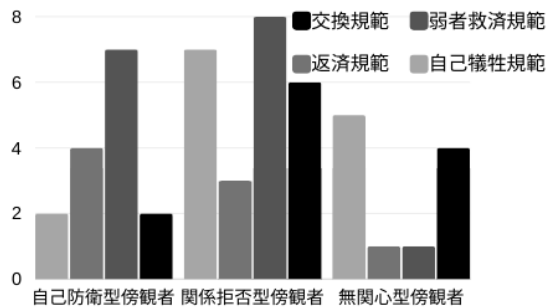


図1 傍観者分類別の援助規範

自己防衛型傍観者において、弱者救済規範が11人中7人と最も多かった。さらに他の傍観者と比較しても、全体に占める弱者救済規範の割合が高かった。

関係拒否型傍観者において、自己防衛型傍観者と同様に弱者救済規範24人中8人が最も多かった。

無関心型傍観者において、弱者救済規範が15人中1人と少なかった。これは他の2つの傍観者と比べても非常に低い割合であった。

4. 考察

以上の結果から、自己防衛型傍観者は最も仲裁者になりうると考えられる。関係拒否型傍観者も仲裁者になりうると考えられる。無関心型傍観者は最も仲裁者になりにくいと考えられる。

5. おわりに

この探Qによって傍観者にも仲裁者になる要素はあり、行動を起こせばいじめの抑制、ひいてはいじめを起こさない環境づくりができる可能性は大いにあることがわかった。いじめは個人間だけの問題ではなく、周りにいる人間も関わって展開していくということを認識することが大切である。

参考文献

- 文部科学省初等中等教育局(2022):[いじめの状況及び文部科学省の取組について](#) 2023.7.26
- 藤村 優菜(2018):いじめ傍観者といじめの援助抑制要因に関する研究 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要p.71-81
- 佐久間 浩美・朝倉 隆司(2018):いじめを容認する態度といじめに関わる役割行動に関する検討 学校保健研究58巻3号p.131-144
- 竹田 敏彦 (2022):いじめをなくすためにはどうすればよいのかー傍観者を仲裁者に変えるー安田大学紀要48号p.147-158
- 箱井 英・高木 修(1987)「援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較」社会心理学研究第3巻p.39-47
- 渡部 雅之(2000):「いじめ」傍観者意識の学生、性、並びに場面における違い」第42回総会発表論文集p.160